

第11回「日本語大賞」

テーマ「おもしろい日本語」

中学生の部 優秀賞 受賞作品

「迷惑とは」

宮城県

仙台市立向陽台中学校

3年 柏崎 日向子

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

七月、祖父母が弘前から仙台に遊びに来た。祖父は庭師で、我が家の庭木の手入れをしてくれる。前回の手入れから五か月振りの再会だ。たくさんのお土産を箱いっぱいにつけてきてくれるのも、祖父母を待つ理由の一つだ。私の目当てはお菓子。箱を覗くと、あるあるある。ちよつと食べてみよう。もう少し食べてみよう。あれもこれも、食べてみよう。口いっぱい甘さと幸せが広がる。至福のひと時だ。お腹がいっぱいになってきた。

「そのチョコレートとろける。」

剪定ばさみがぶら下がった革のベルトを外しながら、部屋に入ってきた祖父が、テーブルの上に残しておいたチョコレートを見てつぶやいた。きつとおじいちゃんは最近、手品を習い始めたのだなと思った。チョコレートを見てチチンパイと魔法をかけると、あらあら不思議。みるみるチョコレートは溶けていく。

いや、どうやらそういうことではなさそうだ。なぜなら、

「日向子ちゃん、そのチョコレートとろけるよ。」

今度は、私の目をしっかりと見て、祖父が言ったからだ。ははあん、分かった。今、祖父は私がハンドパワーを使えるように力を授けてくれたのだ。ならばよし、チャレンジだ。前ならえをした手のひらをパーにしてチョコレートに向けてみた。溶けるか、チョコレート……。何の変化もないようだ。そして祖父が私を見る顔の周りには、ハテナがいっぱいだ。もしかして、私が溶ければいいのかと思ひ、人間が溶けるとどうなるか想像をして、ダンスで表現しようと考えた。手をばんざいにして、屈伸をしながら体をくねくねさせてみた。違う。これでは、海中のわかめだ。ならば次は、両手をほっぺに当て、顔をくしゃくしゃにして、腰をふりふりしてみた。祖父は笑い始めた。

「おめ、何してらんだば。」

「溶けようと思つて。」

「じよんずだなあ(上手だね)。」

祖父は爆笑だ。

「チョコ溶けてまるはんで、とろけるつてしゃんべつたの。」

何かがかみ合っていないことには気づいていたが、もうこうなったらお手上げだ。これは世界最難解の言語。もはや方言ではなく、津軽語だからだ。正解は何か、祖父に尋ねた。とろけるの正解は『片付ける』だった。チョコレートが溶けてしまうから片付けなさい。祖父は私にそう言ったのだ。両親は普段は標準語だが、祖父よりマイルドな津軽弁も話すので、理解できる部分もある。しかし、ネイティブスピーカーの祖父母には完全にお手上げだ。

私が知っている津軽語の中で、最も誤解を受けやすい言葉に『迷惑』がある。例えば、親切にしてもらった時、津軽の人は親切にしてくれた人に向かって平気でこういう。迷惑だと。実際には、迷惑が更になまって『めやぐ』となり、その上に感動詞がくっついて、

「わいはあー、めやぐだじや。」

となる。私ならむつとするとろけるだが、これまた津軽の人は笑顔でこう返す。

「なあーんも、なんも。」

会話から想像できるように、この場合の迷惑は、国語辞典に載っている迷惑とはかけ離れた意味だ。

標準語に訳すと『申し訳ない』だろう。従って、人助けをした時も、願い事を叶えてあげた時も、お土産を渡した時でさえも必ず迷惑だと言われるのだ。ということは、私はさつき少し失敗をした。祖母からお土産を貰った時つい、ありがとうと言ってしまった。模範解答はこうだったのだ。『いつも』という意味の『むったど』を付けて

「わいはあー、むったど、めやぐだじやー。」

「なあーんも、なんも。」

ふんわり温かい、魂を包み込んでくれるような言葉が返ってきたに違いない。